

II. 寄 稿



石川県立看護大学開学20周年に寄せて

かほく市長 油野 和一郎

石川県立看護大学が開学20周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

貴大学は、看護学に関する高度な専門的知識と技術を教授研究し、豊かな人間性と高い資質を備えた人材を育成するとともに、県内の看護教育・研究・研修の拠点として、人々の健康の増進と福祉の向上に寄与することを目的として、平成12年4月に、かほく市学園台の地において開学されました。

以来、平成16年に大学院修士課程を、平成18年には博士課程を開設し、さらに平成30年度からは大学院に助産師養成課程を設け、従来からの看護師、保健師と合わせて3つの看護職能を養成する大学にされ、これまでに多くの優秀な卒業生が巣立ち、県内の医療機関はもとより、全国各地において幅広い分野で活躍されております。これもひとえに歴代の学長をはじめ、教職員ならびに関係者の皆様の弛まぬご努力の賜物であり、心から敬意を表しますとともに、感謝を申し上げます。

さて、貴大学とかほく市は、平成22年10月に、従来の個別連携を発展させた「包括的連携に関する協定」を締結し、貴大学が備える医療や保健・福祉をはじめとするさまざまな専門知識を本市のまちづくりに、また、地域の資源を実践教育の場として人材育成や地域貢献に活かし、相互の組織的な連携・協力体制をさらに深めていただいております。この中で、現在は、相互に密接な連携協力を図りながら、本市の重点施策の一つに掲げております「地域で支える市民の健康と生きがいづくり」のために、認知症予防や食生活改善などに加え、子育て支援の充実といった様々な地域の課題に対して、貴大学の力をお借りしつつ、本市の健康なまちづくりを進めているところであります。

この包括的連携事業の一つとして、学生の皆様に栄養のバランスが取れたレシピを考案していただいている「かほく健康弁当」で、広く市民の皆様などに、毎年好評をいただいております。また、貴大学と本市とイオンモールかほくなどの連携によりまして、市民の皆様の冬季間の運動不足解消と健康増進を図ることを目的に、「か歩く健康ウォーキング事業」を平成28年度から実施し、毎年多くの方に参加いただいております。

さて、本市は、合併してから17年目を迎えておりますが、これまで安全で安心なまちづくり、住みよさを実感できるまちづくりに全力で取り組んでまいりました。貴大学が立地している「北部交流ゾーン」におきましては、これまで住環境の充実を図るとともに、県立看護大インターチェンジや道の駅高松を広域交流の結節点として、貴大学を中心に「健康・福祉」・「産業振興」・「観光振興」をテーマに、市内外の交流促進を図ってまいりましたが、本市では、このたび北部交流ゾーン振興ビジョンの実施計画を策定し、更なる活性化と魅力づくりにつなげてまいりたいと考えておりますので、貴大学には、今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、貴大学より、これまで本市の健康なまちづくりに格別のご支援とご協力をいただいておりますことに対しまして、この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げますとともに、開学20周年という節目を迎えられた貴大学の今後ますますのご発展と関係者の皆様方のさらなるご活躍をご祈念申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



～石川県立看護大学開学20周年に寄せて～

石川県医師会 会長 安田 健二

石川県立看護大学がこのたび開学20周年を迎えられましたことは誠によろこばしく、石川県医師会を代表いたしまして、衷心よりお祝いを申し上げます。

石川県立看護大学は2000年4月という今世紀初めの大きな節目の年に、日本海を望む自然に恵まれた環境の中でキャンパスを整備され、高度な専門性と豊かな人間性を兼ね備えた看護職者を育成することを理念として開学されました。それから今日まで20年という歳月が過ぎたわけではありますが、金川克子初代学長、木村賛第2代学長、そして現在の石垣和子第3代学長をはじめ学内外の関係者の方々のこれまでの多大なご尽力に対しまして深く敬意を表する次第であります。

この間、我が国では世界に類を見ない少子高齢化が進行し、現在はまた2025年問題、2040年問題とされており、今後さらに大変厳しい状況が進んでいくことが見込まれております。そして、このような中にありましても、誰もが住み慣れた地域で医療、看護、介護をはじめ幅広いサービスが一体的に受けられるよう「地域包括ケアシステム」を構築していくことが国を挙げての大きな課題となっております。また、このことと相まって、三位一体とされる「地域医療構想」や医師・医療従事者の「働き方改革」、「医師の偏在対策」という医療制度改革、さらには人生100年時代を見据えた「全世代型社会保障改革」の論議など社会保障制度全般にわたる大きな転換期を迎えているところであります。

こうしたなか、県立看護大学にありましても、これまで、その時々ニーズに的確に対応すべく、大学院の新設等の教育体制の充実強化を図られ、看護学部、大学院看護学研究科はもとより認定看護師教育課程においても高度かつ専門的な知識・技術を習得した優れた人材を数多く（1800人にも及ぶとお聞きしておりますが）育成してこられたところであります。これらの方々には県内外の看護の現場で、また看護教育の現場でご活躍をいただいております。このことは貴学がその使命をしっかりと果たしてこられたことの何よりの証ではありますが、今日の未曾有の転換期という状況に鑑み、今後とも、本会も含め関係機関・団体との密接な連携の下、建学の精神を遺憾なく発揮され、地域社会に一層のご貢献を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、石川県立看護大学のさらなるご発展と関係者各位のご健勝、ご活躍を祈念し、お祝いの言葉といたします。



開学20周年に寄せて

公益社団法人石川県看護協会 会長 小藤 幹恵

石川県立看護大学におかれましては、本年、20周年を迎えられましたこと、誠に慶賀に存じます。この機会には、多くの「2」が集積する印象深い記念の年であると思います。21世紀が幕を開けた2000年（平成12年）に開学され、20周年の今年は2020年で令和2年、改元後の初の正月を迎えています。また、ナイチンゲール生誕200年でもあることから、SDGs（国連開発計画 持続可能な開発目標）におけるトリプル・インパクトを期待される看護についてナーシング・ナウキャンペーンが世界中で行われています。

この20年、看護にも変化がありました。2000年の介護保険制度開始、病院完結型から地域完結型、地域包括ケア、地域共生といわれる社会の方向の中で、病院内に集中していた看護が地域へ羽ばたき、活躍が進みました。また、医療の個別化、医療と暮らしのボーダーレス化、科学技術の急速な進展、人生100年時代、ユビキタス+AI等実用される中で、人間性への問いかけや摸索が深まり、個の尊重、倫理意識の高まりとその可視化が進められてきていると思います。さらに、医療環境の変化の中で、職種や職域の内外での顔が見える心が通い合った連携を基盤としたより良い看護の探求を力強くすすめています。これらの動きは、「健康的に暮らすこと」と「共に幸せに暮らす」ことに向けて進められた、たゆみない歩みによるものと思います。

看護の大学教育の機関として県内で第2番目の早期の設置は、県内の看護職にとって、大きな喜びでした。学校で何を学ぶかは非常に重要です。学びによって、さらに学びたいと欲することが促されます。どうあったらより良いかを考えるようになります。石川県立看護大学は、人間が持つこのような本質的な欲求に応える教育の場として、石川県内を中心とした地域の人々の願いを捉えて、県下の特色を活用し、実際の暮らしとの関連した多様な教育的取り組みを重ねられ、新卒者から博士修了者まで多くの看護職を輩出されましたこと、そして、県内を中心とした看護の展開に大いなる貢献をされておられることに深く敬意を表します。その一つに、新人看護師育成に関して県内全体を調査され、本県での看護師の成長を促す現任教育の在り方の示唆となりました。看護職としての成長が、離職などによる中断の回避に繋がる、県内看護界の取り組みへの優れた支援であったことが思い出されます。

今や、卒業生、修了生の皆様は、大学での学びによって深い思いやりに満ちた、且つ、逞しい看護を実践される心強い存在として、石川県下の各地、各場で、最前線のリーダーとして活躍されておられること、何よりと存じます。情報や通信・交通の技術進歩は、人同士の交流の質や量も変化させるとは思いますが、顔の見える親しみ感や、直接かかわることのできる近距離感等、身近な場への視点を大切にして、受け手の方々への思う存分の看護に邁進していただけますようお願いしております。

最後に、この20年の石川県立看護大学のご活動、ご尽力に感謝申し上げ、これまでの素晴らしい歩みを基盤にして、大きな夢に向かっての益々のご発展を祈念いたします。そして、ご関係の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



20周年に寄せて

石川県立中央病院 看護部長 長 真美恵

開学20周年、誠におめでとうございます。

20年という月日の経過において、人の成長とともに貴学が時間を刻み、多くの優秀な人材を輩出してこられたことに心から敬意を表します。また、貴学を卒業の後、ご縁があって当院に就業して下さった方々が、臨床現場で日々活躍してくれていることをご報告するとともに、これまで看護基礎教育にご尽力いただいたことに感謝申し上げます。

急速に少子高齢化が進むなか、地域包括ケアシステムの構築とともに、看護職も役割拡大が求められています。医療機能の分化により、当院では急性期医療を提供するために、まずは患者の生命を救うこと、そして地域に、生活の場に移行できるよう回復にむけて働きかけるという役割を担っております。看護職員は、社会の変化に柔軟に対応する中で、看護の本質を見失うことなく、多職種と協働してより質の高い医療・看護の提供をしていくことが必要です。入職してきた看護職員の継続教育はもとよりその基盤となる看護基礎教育が、重要であることは紛れもない事実です。貴学にて学び、大切に育ててこられた看護学生の皆さまを臨床現場に迎え、看護実践を通して、いかに看護者として成熟させていくかは、私たち、看護管理者の責務と考え、今後も人材育成に努めていかなければならないと思いを新たにいたしました。

また、看護教育のみならず大学院における高度な専門的知識・技術・実践能力をもつ看護職者、教育者・研究者を育成してこられたことは、石川県内のみならず北陸を中心とした医療機関や教育現場にとって大変意義深く、今後も大いなる期待をしております。当院にも、貴学大学院を修了したがん専門看護師や認定看護管理者が高度な看護実践能力を発揮してくれており頼もしい限りです。さらに、看護キャリア支援センターにおける認定看護師教育課程及び認定看護管理者教育課程の開講におきましても、感染管理認定看護師、認知症看護認定看護師、認定看護管理者が誕生し活躍してくれていることは病院組織にとっても大きな力となっております。

看護者は、科学や医療の進歩、社会的価値の変化にともない多様化する人々の健康上のニーズに対応していくために、たゆみない専門職業人としての研鑽に励み、能力の維持開発に努めることが責務といわれております。石川県立看護大学がここ石川の地に在ることに感謝するとともに今後も更なる発展を遂げますことを祈念してお祝いの言葉といたします。



石川県立看護大学開学20周年に寄せて

石川県立看護大学後援会会長 渡辺 智子

石川県立看護大学が開学20周年を迎えられましたこと、心からお喜び申し上げます。

石川県立看護大学が、石川県内の看護教育・研究・研修の拠点としての地位を確立され、医療・保健・福祉の現場で大いに活躍する多くの卒業生を輩出し続けていることに敬意を表するとともに、学生の皆さんが、講義・実習など多忙なスケジュールの中でたゆまぬ努力を続けておられることに、保護者の一人として大変誇りに思います。

少子・高齢化の進展、疾病構造の変化、医療技術の高度化、国民の健康な生活への意識の高まりなど、医療・保健・福祉を取り巻く環境は、大きく変化しています。こうした中で、患者さんの一番近くで24時間365日ケアする看護師の方々には、患者さんを十分に理解し、その方にふさわしい看護を探求すること、また、患者さんのそばに寄り添い、その方のわずかな変化をとらえ、順調な回復やわずかな変化を共に喜び、痛み・苦痛の緩和はもちろん、不安な思いに心を寄せる、優しさあふれる看護を行っていただけたら、どんなに素晴らしいかと思います。

私は、事務職員として金沢大学に勤務しておりますが、以前、附属病院で、看護職員の人事労務に係る業務に従事した際、その業務を通して、看護師の皆さまが、仕事と家庭を必死で両立させながら、最後の砦である大学病院でチーム医療に積極的に関わり、患者さんのために努力し続けていることに感銘を受け、看護師の偉大さ、看護職の崇高さを強く感じました。

中でも、新規採用者オリエンテーションにおける「先輩からのメッセージ」で、採用2年目、5年目、10年目の看護師の方から、患者さんと関わる上でのさまざまな不安、仕事と家庭の両立についての悩みなどを、先輩看護師の親身なアドバイスで乗り越えることができたこと、初めて患者さんの死に立ち会った時の悲しみ、それでもご遺族から「優しい看護をしてくれてありがとう」という感謝の言葉をいただいた時に、看護師になって本当に良かったと思ったこと、後輩の看護師が立派に育っていく姿を見てとても嬉しかったことなどの話を聞き、大変感動し、私も事務職員として、附属病院ひいては金沢大学に貢献できるように努力しなければならないと改めて考えたことを思い出します。

また、石川県立看護大学を卒業し、専門職としての自覚を持って金沢大学附属病院に入職した看護師の皆さまが、結婚や夫の転勤による転居や進学以外での退職が非常に少なく、永く勤務し、キャリアアップしている方が多いことも知りました。石川県立看護大学の理念である、「心と身体をやさしくみつめるケアを目指して、広く知識を授け、看護学に関する高度な専門的知識と技術を教授研究するとともに、豊かな人間性と高い資質を備えた人材を育成」する教育の成果だと思えます。

私の娘は、中学生の時に、当時看護師を目指して勉学に励んでいた部活動のコーチに刺激を受け、看護師になると決めました。その娘が、4月から、看護師としての一步を踏み出します。やりがいと充実感、そして、患者さんから「ありがとう」の一言をいただけた時の大きな喜びを感じることができる仕事に自信と誇りを持ち、確かな知識と技術、そして優しさを身に付けた看護師を目指して頑張ってもらいたいと思います。

4年間娘が大変お世話になったことへの感謝とともに、石川県立看護大学の益々のご発展を心よりお祈りし、お祝いの言葉とさせていただきます。



内(ウチ)の人として過ごした日々

石川県立看護大学特任教授・名誉教授 浅見 洋

開学準備委員会の席上だった。どのようなシチュエーションだったかは覚えていないが、初代学長内定者の金川先生から「先生はもう内(ウチ)の人ですから」という言葉を聞いたことがある。ウチ(内)とソト(外)という言葉は倫理学の和辻哲郎は「日本人の暮らし方」、文化人類学の中根千枝は「日本型社会の特質」を説明するタームとして使用した。ウチとは「へだてなき間柄」のことであり、「身内」を意味している。そして、私自身、文字通りウチの人となった開学の日からこの20年間、教授、特任教授という肩書で、石川県立看護大学の身内として過ごしてきた(つもりでいる)。

学生部長になって間もない頃、全学集会で学生に「学歴は亀の甲羅こうらのようなもので、あなたたちは好むと好まざるとに関わらず、石川県立看護大学に在学したという経歴をもつことになる。学歴という甲羅はあなたたちを守るものであり、ソトの人はあなたたちの甲羅を見て評価を下すことがある。だから、あなたとあなたの身内を守る甲羅が強く、評価されるものとなるよう行動してほしい。逆に、大学やその仲間たちをソトで悪しあざまにいう人、貶おとしめめる人は天に唾つばする人のようである。それは自分の面汚つらよごしとなり、甲羅を弱く、脆いものにする」というような話をした記憶がある。

本学は私にとって教職員、学生と共に働き、学ぶ場であった。勿論、ヨソヨソしい人もいたし、親しみをもてないこともあったが、基本的にこれまで私はウチの人だったと思う。ウチの人として過ごした20年はアツという間だったが、回顧するとさまざまな思い出が蘇ってくる。1つ2つ紹介したい。開学当初は学生委員長、図書館運営委員長として学生生活の基盤を整えることに心を配った。特に、学生自治会、大学祭実行委員会、大学祭の核となる文化系(美術、音楽、茶道)サークルを創るよう学生に働きかけた。1回生は実にアクティブで、それらのサークルは夏休み前には活動を始めた。ただし、教員の数がまだ少なくて顧問のなり手がなかったが、茶道部は故佐藤弘美先生(サトチャン)がすぐに手を挙げてくれた。美術と音楽サークルはなり手がなく、センスがない私が顧問をやることになった。それから20年、音楽、茶道サークルによる卒業式、入学式の合唱とお点前はウチから出ていく人、身内になる人の送迎に華を添え続けている。

開学2年後には大学院設置委員長として修士(博士前期)課程開設(04年)、博士課程開設(06年)に関わった。申請準備、先行大学視察、文部省折衝など、多くの貴重な経験をさせていただいた。特に、本学独自の分野である看護デザイン分野やまだ希少であった専門看護師教育課程の設置に関して、身内の議論をまとめ、設置審や文部省の説明に臨んだ時には、石川県立看護大学の一員だという意識を強くもった。

大学コンソーシアム研究横断型カリキュラム事業「鈴木大拙と日本文化—鈴木大拙の未翻訳英文著作を通して—」の石川県立看護大主催公開シンポジウム(2007年2月18日)にあふれるばかりの出ががあったこと、2011年度石川県地域連携促進事業に採択された「来キト人喜キト人里創り創成プロジェクト事業」のレシピコンテスト、猿鬼歩こう走ろう健康大会に大型バスで行ったことなど、地域貢献事業ではウチの人たちと協力して活動した、楽しい思い出が残っている。半面、ウチにいたからこそ体験した、ほろ苦い体験も幾つかあった。

時々、学生が考えたシンボルマークと大学ネームが入ったTシャツやウィンドブレーカーを着て、自宅周辺をウォーキングをすることがある。これからも、出会う人に胸を張って石川県立看護大学の身内です(でした)と見せびらかすことができる、誇らしい大学であり続けてほしいと願っている。



石川県立看護大学事務局長を経験して

公益財団法人いしかわ結婚・子育て支援財団 専務理事 出村 邦夫

開学20周年おめでとうございます。

私は2016年度より3年間事務局長として在任いたしました。

この3年間は、県の健康福祉部長や教育長を歴任され行政経験豊富な木下公司氏が石川県公立大学法人の二代目理事長に就任していた期間とちょうど重なっており、思い返せば、医療行政・教育行政を熟知された経営責任者である木下理事長と、看護教育のスペシャリストである石垣和子学長を始めとした熱意溢れる素晴らしい教授陣との間でただただ狼狽していた3年間だったような気がします。

近隣に次々と看護系大学や看護学部が開設する時期とも重なり、優秀な学生の確保が喫緊の課題であった中、大学院での「助産師養成課程開設」や、そのキックオフイベントとしての「日中韓看護フォーラム いん いしかわ」の開催、「カリキュラム改定」、「入試改革」、「グローバルはまなす基金などの学生支援」、「教員の世代交代」、「海外の大学とのMOU締結」など次から次へと仕事をこなし、難題を乗り越えていく石垣学長の熱意や真摯な姿にも圧倒されつつ勉強させていただいた3年間でもありました。

石垣学長や先生方からは、石川県立看護大学の将来への夢や思いをいくつもお聞かせいただきましたが、今となっては、その実現のお力になれなかったことに申し訳ない気持ちでいっぱいです。併せて、温かい思いやりに満ちた看護の心で接していただいたことを感謝しています。

看護大学での日々の仕事は、私の人生にとって大きな出来事であり、かけがえのない経験であったと今更ながら思われます。

社会や教育が大きく変化する中、無事に20周年を迎えることができたのは、先見性を持って的確に対応されてきた歴代の学長や教職員の努力はもちろんですが、石川県や地元かほく市、医師会や看護協会をはじめとした多くの医療関係者、特に実習施設の皆様、また、開学以来温かく見守っていただいている周辺地域の皆様、保護者や学生・卒業生の皆様など、様々な形で支えてくださった多くの方々の並々ならぬご尽力によるものと存じます。

20周年は、これまでの歩みを振り返り、「広く知識を授け、看護学に関する高度な専門的知識と技術を教授研究し、豊かな人間性と高い資質を兼ね備えた人材を育成するとともに、県内の看護教育・研究・研修の拠点として、人々の健康の増進と福祉の向上に寄与する」という大学設立の趣旨に立ち返るよい機会でもあると思います。

皆様の看護や大学に対する思いが今後も引き継がれ50周年、100周年と末永く続き、この20年で培われてきた石川県立看護大学の最大の財産である良き校風と歴史が根となり幹となり、さらに充実・発展し、次々と花を咲かせていくことを心より願ってやみません。



石川県立看護大学での思い出と期待

石川県立看護大学 初代学長 金川 克子

石川県立看護大学が2000年（平成12年）に創立されて以来20年の月日が経ったことに対し、敬意を払いたいと思います。併せて大学院修士課程、博士課程を設置し、大学の体を築いてきました。

その間、大学内では様々のことがありました。例えば不協和と揶揄されましたワシントン大学との学術協定の締結、学生と共に汗を流したソフトボール大会、石川県の知事をはじめとし、来賓の方々をお招きしての入学式と卒業式、事務当局の場所の分離（学生課と庶務課）、教授会や各種委員会のたちあげと活動、タジキスタンとの交流、学生にとっては脅威と感ずる修士論文のプロセス等、また、ある時には苦汁をなめたこともありました。順調な歩みであったと思います。

石川県立看護大学は後発の大学でありましたが、その後の看護系大学の発展には目の見張る思いでした。

大学設立前に何度か現地に赴いたり、東京での会議を持つなどいたしました。大学をつくるには多くの人々の支援が必要である事を知らされました。

大学の活動は、保健所や市町村の保健活動とは違った特色のあるものであるべきで、予算もそのためのものであるとした地域総合センター（現在は名称変更になっている）設立の存在に関し激論をたたかわせたものであった。大学運営には素人である私には多くのものを学ばせてもらいました。

大学外では、日本老年看護学会の編集委員長をしていた時の、佐藤ひろみ先生の貢献ぶりには頭の下がる思いでした。併せて、町民との認知症の講義や中央から見えた先生の講演会等、今日も別の形で続いているとの由、継続は力なりとのことわざ通りです。

石川県立看護大学は看護系大学として、後発でありましたが、現在は200余と伺い、ひけはとらず、少々金沢の地から離れていますが、名実ともに充実した大学になることを期待しています。先生方の論文も多数出版されており、その一端として石川看護雑誌の意義もあると存じます。

願わくば、ハードの面からは大学院の分離や、研究室の充実、研究所なり、施設拡充がのぞましい。

ソフトの面からは、もちろん欧米と張り合うことも必要であるが、アジアとの交流を望む。それと同時に日本海圏、地元に関連した（雪国に強いもの、農業、繊維、郷土食、郷土史等）もの、ボランティア活動等に触手することを望む。



開学20周年を祝って

石川県立看護大学 第2代学長 木村 賛

石川県立看護大学が本年開学20周年を迎えました。10周年記念事業を行ったのがこの間のように思えますが、早くもその倍の年数を迎えたことをお祝い申し上げます。

本学は金川初代学長のもと4年制看護大学として創設されました。その4年後にはこれも金川元学長の的確な判断により間を置かずに、大学院が博士課程までの5年制として整備されました。この大学院を基盤として専門看護師、認定看護管理者、助産師などの養成課程も順次積み上げられ、深く広い学問分野を提供できるようになりました。

大学院へは多くの現職看護師も職業上から出た問題へ対処するために集まってきています。年齢や経験の多彩な大学院生が集まる場となりました。学部教育では比較的によく多くの教員で個人にまで目の届く指導を行ってきました。一方、学生の自主的発展を伸ばすことも重視しており、たとえば4年時の卒業研究を必須としてきました。このように、本学では卒業した後も自主的に発展し続ける能力を養う教育を行い、さらに必要があれば再び教育・研修ができる受け皿を作ってきました。優秀な学生が集まり、この20年間に充実した能力を持つ卒業生・修了生を出してきました。この人材の広がり、県内ばかりでなく全国に及んでいます。

近年、日本列島には地震、暴風雨、高温化などの自然災害や現今問題の流行病などが次々と襲ってきています。2007年の能登半島地震では、幸い本学には玄関ホール以外に人的・物的被害はほとんどありませんでしたが、門前町などに大きな被害が出ました。このとき、本学教職員はまず学生教職員の安否確認をしたのち、さらに進んで被災地への援助に向かいました。県の要請による健康管理チームを交代で派遣し、現地の医療保健関係者に協力して、被災地の看護活動の一端を担いました。これに参加したことがあり今も在職中の方々の数は少なくなったではありませんが、この経験を引き継いだ備えはこの地にある看護大学として必要なことかと思えます。

本学では国際交流にも力を入れ、また国内での研修・地域貢献事業も創立時から数多く、教職員の方々がよくやっているとほめるほど多種多様な活動が行われてきました。国際交流では早くからアメリカ合衆国での研修をはじめ、いまでは韓国、タイでも研修が行われているとのこと。海外大学との交流、国際協力事業団(JICA)と協力した外国人研修員の受け入れも積極的に行ってきました。北陸地域における看護の研修や検討会、講演会なども広い分野について引き受けてきました。

これからも優れた学生・大学院生を育て、看護の学問と社会とに貢献していかれることと期待しています。